
魔の遺産 夜の波音

阿川弘之自選作品—II

新潮社版

阿川弘之自選作品

Ⅱ

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1977.



魔 ^ま の遺 ^い 産 ^{さん} ・夜 ^{よる} の波 ^{なみ} 音 ^{おと}		昭和五十二年十月二十日 印刷	昭和五十二年十月二十五日 発行	著者 阿川弘之 (あがわひろゆき)	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一	電話 業務 〇六六 五五一 編集 〇六六 五四一一 振替東京 四一八〇八	印刷所 二光印刷株式会社	製本所 新宿加藤製本	定価 二七〇〇円
--	--	----------------	-----------------	-------------------	------------	--------------	----------------------	--------------------------------------	--------------	------------	----------

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

魔の遺産	7
八月六日	151
蝙蝠	169
光の潮	185
鱸とをこぜ	193
赤い自転車	203
青竹のはなし	221
こけし	233
胡媚娘	245

千 日 酒	255
江 南 楊 柳	263
煙 管	283
野 藤	291
南 蛮 菓 子	303
汁 粉 屋 善 兵 衛	319
紺 絣 鬼 縁 起	333
夜 の 波 音	349
作 品 後 記	367
初 出 と 初 収 録	376

阿川弘之自選作品
Ⅱ

魔の遺産・夜の波音 他

魔の遺産

第一章

一

二人が登つて来た小高い山は、太田川の三角洲の上に末ひろがりに拡がつた市街の、扇のかなめの位置にあたつてゐたから、前が拓けると、街の大部分を鳥瞰する事が出来た。

赤松の疎林に蔽はれた浅い山だが、羊歯しだや小笹や古い落葉の発散する山の匂ひがしてゐた。白い花の房をつけた、小さな馬酔木すいぼの木を所々に飾つて、禿げた峯の鞍部は其処

から右の手へ、次第に低く、白い花崗岩質の其の山肌を松林の中へ消し、市の水源池の方へ下つて行つてゐる。それが平地に尽きる所に近く、満ち潮の水を豊かに湛へた川が、二つに分れてゐるのは、広島市を貫流する七つの流れの最初の分岐点である。白く光る帆を弓なりに張つた川舟が二艘、何か非常に滑らかなものの上を、糸で曳かれるやうに静かに溯つてゐる。川は流れる事を忘れて、春の日にゆつくりと昼寝をしてゐるやうに見えた。

眼を移して、鞍部から直角の方角を見下ろすと、几帳面に耕された段々畠が、小笹の繁みのすぐ下まで迫つて来てゐる。ひよろひよろした小麦が、其の畝に生え並んで、麦のほとりには、菜の花が群れて咲いてゐる。これは山を下つて遠くから眺めると、黄と緑の縞模様しまもようの敷物を掛けたやうに美しく望まれる景色だ。

真下の小学校の、明るく照り返す四角な校庭は、今授業中と見えて、ひっそり閑と人影が無い。校庭の周囲には芽を吹いた柳や桃や花蘇芳はなすわうの花の色が見える。田の中の家々が南へ次第に密集して行く所を、川の一つが割つて橋が掛つてゐる。銀の板のやうに光つて、大きくうねりながら、烟霞えんさの中を広島湾へ消えてゐる太田川の分流は、七つのうち五つまでを其所から数へる事が出来た。広島駅に入る長い貨物列車が、鉄橋を渡つて行く。機関車の首のつけ根か

ら、白い煙が吹き出すと、暫くして汽笛の音が聞えて来る。會て、被爆直後の写真で見た、見渡すかぎりの沙漠の町は、今、其処から望む限り、春の陽光を浴びた家、家、家の屋根で、みつしりと埋め尽されてゐた。市街の中心部に樹木の緑色が殆ど見当らない事に気づきさへしなければ、八年前、此の町が異様な滅び方をした事、白くふくれた、京のはひ兒人形のやうな水死体が、川筋に無数に浮いて、潮につれて上げたり下げたりしてゐた事、皮膚の焼けて垂れ下つたけ物のやうな怪我人や、腐肉のやうな焼死体が、其の小学校の庭、其の道路を埋めてゐた等といふ事が、もしかすると、奇怪な幻想か白昼夢だつたのではないかと想はれる程、それは明るく穏かな眺望である。

野口は折つて坐つた膝に両腕を廻して、広島市の景觀を前に、自分の仕事の事を考へてゐた。叔母の常子は切株の上で夏蜜柑の皮をむいてゐる。豊富過ぎる程の陽は二人の上に降りそそいでゐた。常子は日光の直射を避けるやうに、横を向いて、ハンケチで額の上に蔭を作つてゐる。日焦けをいふのだらうと野口は思つてゐた。

此の夏までに、「原爆八年後の広島」といふ文学的な報告を書くのが、彼の約束してゐる仕事であつた。雑誌が其の仕事を野口に指名して来たのは、彼が十五年前の此処の高等学校の卒業生である事が、一つの理由であつた。それ

から、野口には広島に叔父の家が——日限を定めず氣楽に滞在出来る身寄りのある事が、双方に都合だつたからでもある。野口はしかし、漠然とした不安を感じてゐた。市の北のはづれの此の山の上から眺めては、既に焼け跡の荒地も見出し難い程建てこんで見える街の姿は、彼に、突き崩された巢を、何も考へず何も言はず、せつせと建て直してやまない勤勉な蟻の営みを想はせた。今、ガイガー計数器を提げて、広島を歩き廻つても、原子爆弾が残した放射能はすべて消えて、恐らく針はもはやピクリとも動かないにちがひないが、これから自分が、此の建て直された蟻の巣の中を訪ね歩いて、頭の中の計数器に、果してどんな反応を導き出す事が出来るか——。

野口は広島に着いて五日目であつたが、丁度、叔父の黒川辰造と常子との間に遅く出来た末つ児の健が、肛門の周囲に腫れ物を作つて入院する騒ぎに出席はしたので、それにまぎれて、未だ何も観てゐなかつた。

辰造は彼の母の弟で、元は商工省系統の役人であつた。

戦争中占領地の仕事を託されてマレーに行き、帰国して追放に逢ふと、家族が疎開中被災して、二人の子供を失つた広島に落ちつき、間もなく建築資材の売買をする商事会社を作つて、その経営にあたつてゐる。常子にとつては広島は郷里であつた。野口は少年期の終り頃、三十幾つかの

此の叔母に憧れて、大阪、福岡、門司と、常子の家に移る先を訪ねては、彼女の腰にくつついて、知らない町を見物して歩いた。さういふ気持は彼が広島の高専学校に入り、それを卒業する頃まで続いたが、十年ぶりで逢ふ常子は、数へ年で四十三になつて、髪に白毛が混り、明るい光の下では、目尻や額に小皺の数が目立つやうになつてゐた。彼女はしかし、子供の病氣にも拘らず、至極朗らかで、調子はづれの歌を唱ひながらいつもいそいそと食事の支度などしてゐた。派手な顔立ちにそぐはない音痴で、音楽家が彼女の歌を譜に写し取るとしたら、さぞ難儀をするだらうと思はれるやうな節廻しで、家事をしながら、常子は臆面もなくさも楽しげに、古い大正時代の唱歌を唱ふのだが、声音だけは若々しく美しいソプラノなので、賑やかに滑稽であると同時に、少々もの悲しく異様な気持も聞く者に起させた。

以前から調子はづれの歌をこんなに歌ふ癖が、叔母にあつたかしらと、初め野口は考へた。そして多分十年ぶりの彼の来訪が、身寄りの乏しくなつた常子を、ひどく朗らかに若やがせてゐるのだらうと思つてゐたが、その内必ずしもさうでないらしい事に気づくと、妙な気がした。原子爆弾とそれが結びつけて考へられる事かどうかは分らなかつたが、被爆の時のショック、それに続く不幸、そして何か

不分明な物質の影響が、彼女の神経の束の中のどれか一本に、異常を起させてゐるのではないか、彼はさういふ想像をしたのである。

日は天心に輝いてゐた。川と川とに挟まれた、真中の大きな三角洲の途中に白く見えるのは、従弟の健が入院してゐる病院である。都市計画で新しく拡張された広い道路が、幾条も、真つ直ぐ南へ伸びてゐるのが見える。視界の左端の低い山の上に、光つて小さく望まれるのは、アメリカが設置した原子爆弾傷害調査委員会——ABCの建物の群である。

野口は、仕事の手始めに、市内で産婦人科医院を開業してゐる古い友人の脇本を訪ねてみてもいいと思つてゐた。

二

滲んだ汗が引くと、肌に寒さが感ぜられた。

「そろそろ帰りませうか」常子が言つた。

細い竹を折つて作つた笛を吹き鳴らしながら、三四人の男の児が上つて来たのを見て、二人は腰の砂を払つて立ち上つた。

「二時間近く留守にしてゐたから、健がぐづぐづ言つてるかも知れないわ」

新しい広島を、何所か高い所から眺めてみようといふ野口に、常子は健を置いて、ピクニックのつもりでついて来たのだつたが、

「わたし、やつぱり今日から病院で泊つてやらうと思ふの。家の方がほつたらかしになるけど……。切開のあとが順調に肉が盛れば、十日もすれば退院出来るでせうよ」

「さうなさい。僕も仕事に掛つてみます」野口は言つた。

「医者の方達に会つてみるつもりです」

二人は赤松の林の中を下りて行つた。山裾の一帯は、もと工兵隊の作業演習場で、石の記念碑が、五つの面から軍人勅諭の五つの文句を鑿でゑぐり取られて、其のまま残つてゐる。

岩と岩との間をしゃがんで下りながら、常子は時々、頬に掌をあてた。

「のぼせたのかな？」

彼女の頬も手も湯につけたやうに赤くなつてゐた。

山で湧いた水が、平地に尽きて、小川になつて流れてゐる。桃や桜の咲き始めた、田舎びた道を二人は、暫く黙つて歩いた。二丁ほど行けば、健の入つた病院の前を通つて市中に通じるバスの乗り場がある。

「わたしの顔、そんなに赤いかしら？」常子は言つた。「春の陽だからと思つて、氣を許してゐたけど、わたし、今日

は困つた事になるかも知れないわ」

「……」

「まる一年も出なかつただけだねえ。——毛穴がひろがつてゐるでせう」

「……」

「腫れて来るのよ」

「どうして？」

「大して心配はないんだけどね、さういふ身体の癖になつてしまつただわね。とてもかゆいの」

彼女はさう言つて、頬にあてた指先で、顔をきまり悪さうにポリポリ搔いた。

「みつともないから、自動車を探して来て貰はうかしら」

野口は急な事で分別がつかず、驚いて、言はれた通り、ひとり、バスの通る道まで走つて行つた。

十五分ほどして、漸くガタピシするダットサンを一台みつめて、彼が乗つて還つて来た時には、麦畑のわきの電柱に隠れるやうに待つてゐた常子の顔は、さつきとははつきり異つて、火ぶくれのやうに、少し赤紫色に腫れ始めてゐた。

「どうしたんです。大丈夫かな？ 病院に行くんだから、すぐ手当をしてもらへばいいが」野口は車の扉をひらいて、常子に乗せながら言つた。「それは、原子爆弾の影響なん

ですか？」

「どうでせう。さうとしか思へないんだけどねえ」常子は言つて、少し熱つぽいらしく、額に手をやつた。そして時時、うつむいては又顔を掻いた。「わたしの顔、もうすぐまるでお岩さんのやうになるのよ」

——彼女は辰造の不在中、広島に里に帰つてゐて、八年前爆撃に遭つたのだが、自身の身体に傷は、特にひどいといふ方ではなかつた。鶴見橋といふ橋の近くに在つた当時の住居が、爆心から約二キロの距りがあつて、家が完全には崩れてしまはなかつたからである。

一年十ヶ月の赤児であつた健と二人、食事をしてゐた常子は、家が傾き、火の手が挙るのを見ると、手ばやく身の廻りの物を腰につけて、ガラスの破片に傷つき泣き叫んでゐる健を負うて逃げ始めたが、三十分ばかり前義勇隊の勤労奉仕に出かけて行つた常子の母は其のまま行方が分らず、県立二中の一年生であつた長男の裕と、市立女学校の二年生であつた長女の友子とは、其の時、既にそれぞれ新大橋の広場と、材木町とで、級友の全員と一緒に死んでゐた。それは後になつて判明した事である。

常子の怪我は、爆撃の瞬間、左の眼の下を青白い光が走り、ザッと鼻血が流れて、其所の皮膚が三日後に銅貨の倍程の大きさに焦げ落ちたのと、翌朝、避難先の中調子とい

ふ村で、左乳の下に青い妙な物が突きささつてゐるのに気づいて抜き取ると、体内から朝食の時使つてゐた見覚えのある塗り物の箸の折れが一寸ばかり、血糊をつけて出て来て、其のあとが二ヶ月近く膿んでゐたのと、それだけであつた。

しかし、熱が出て食欲の無い状態は長く続き、ある日川の流れてよぐれ切つた髪を洗はうと、櫛をつけると、抜毛の夥しいのに彼女は驚いた。水につけてけづると、髪は束になつて抜け落ちた。数日の間に、彼女は後頭部にぼさぼさとした毛を薄く留めただけの全くの禿げ頭になり、五ヶ月近く、頭に風呂敷を巻いて避難先の生活をした。

人から瓶に毛生え薬を頒けて貰ひ、田舎の裏山に登つて、風呂敷を解き、薬を塗つて日光浴するのが唯一の治療であつた。敗戦後の秋で、茸を探しに来た田舎の女の子が、山の上に赤児をつれた、キラキラ光る禿げ頭の女の坐つてゐるのを見て、「キャッ」と言つて逃げて行つた事がある。半ばあきらめてゐた頭部の毛穴から、漸くぼつりぼつり新しい毛が生えて来たのは、翌年の正月であつた。常子はその頃、鏡の前に日に幾度も坐つて、毛抜きでそつと、それをつまんでみては楽しんでゐた。そして彼女の髪の毛が、どうにか見られるだけに生え揃ふ頃には、健の傷も癒えて、夫の辰造は無事に南方から帰つて来た。

二人の子供を喪つた事を除けば、彼等の家庭は、それ以後再生の過程を順調にたどつてゐるやうに思はれたが、三年後の春、流産のあとから、彼女の身体には又変調があらはれるやうになつた。日光の直射や、寒風の吹きさらしに長くあたると、毛穴がひらいて顔や手がひどくかゆくなり、そこがぽっぽつと火照つて、間もなく赤紫色に腫れ上つて来るのである。

野口は道々、さういふ叔母の話聞いた。そして、同仁病院に車をつけて、彼が常子をつたすけ下ろした時には、看護婦や患者達が一様に驚きの眼で迎へた程、彼女の顔は一面、蜂にさされたやうに目も口もまるくなつて腫れ上り、眼の色は黄痘のやうに黄色く濁つてゐた。

すぐ皮膚科の診察室に入つて、医者に注射を一本打つて貰ひ亜鉛華オリヴを塗つて貰つた。常子の顔はそれで余計白い化粧物のやうになつた。それから二人は健のある病室へ歸つた。常子はしかし、

「こんな顔になるから、知らない人は何事かと思ふんだけど、すぐなほる事はなほるのよ」と、案外けろりとしてゐた。

母親の顔を見ると、健はびつくりしたやうに眼を見張つたが、すぐ、我慢してゐた自分の事の方が堪へきれなくなつて、

「痛い痛い、お尻が痛い」と泣き出した。

「泣かないの泣かないの。手術の時、健ちゃんずるぶん強かつたでせう。ね。そしたらあととはもうどんどんよくなるのよ。お母さん、健ちゃんをほつといて、お山なんかへ行つたから、きつとばちが当つたのね。お顔が又こんなになつたわ。でも、健ちゃんのお尻と、お母さんのお顔と、どつちが早くなほるでせう」

常子はその事を言ひながら、手まめに健の毛布をなほしてやつたり、脇机の上の飲みさしの茶を捨てたりした。健は青い、むくんだやうな顔色をしてゐた。野口は横を向いて、二人から眼をそらして、窓の外を眺めてゐた。ノックの音がした。

「奥さん、一寸」と言つて、係の若い医者が顔を出した。野口は常子について廊下へ出た。若い医者は白い上つ張りから、消毒薬の匂ひを發散させながら、

「実は、今朝、お留守中に拜見すると、此の間切開した所の左に、又一つ新しい腫れ物が出来てをりますんでね。最初申し上げたやうに、単純な肛門周囲炎だとは思ひますが、念の為にお子さんの血沈や血液検査を一度やつておきたいと思ひまして――。院長先生からもさういふ指示で、その結果がはつきりしてから、もう一度切開をやりたいと思ひますが……。坊ちゃんはお爆にはお逢ひになつたんで

したか？」と言つた。

「はあ……。当時一年と十ヶ月でしたが。それは、どういふ……？」

「いや。恐らく心配なさるやうな事は何も無いと思ひます。只、今朝拝見すると、又新しい腫れ物が出てゐるものですから」医者は具合悪さうな口調であつた。

正午のサイレンが聞えて來た。

医者に別れて部屋に入ると、野口は、

「どういふのかな、中々厄介なんだね」と言つた。

「もう一度だなんて、いやね」常子はさすがに少ししをれた様子で、小声に言つた。

健は思ひ出しては、「痛い痛い」と、顔をしかめ、涙を出さずに泣いてゐる。

「健ちゃんにはＡＢＣＣには診せた事はあるの？」

「入院する時、院長先生にもそれを訊かれたのよ」常子は言つた。「だけど、叔父さんが、どうしても承知しないの。自動車で迎へに來られた事もあるんだけど、お断りして、わたしも此の子も診て貰つてないんだけどね。主人は、あれはアメリカが広島の人間をモルモットにしてゐるんだから、治療をしてくれないものを、診察だけしてもらつても意味がないから行くなつて言ふでせう。それは本当なんだけどねえ……。さう言つたつて、設備はすばらしい設備が

あるさうだから、こんな事なら、一度健だけでも診て貰つておけばよかつたと思ふけど」

「僕は脇本の所もあれだが、今日は、午後、ＡＢＣＣに行つてみようかな」

「健の事を訊きに？」

「いや。見学に」野口は一寸苦笑した。「構はなければ、健ちゃんや叔母さんの事も、訊いてみていいが、本人が行かなきゃあ、やつぱり分らないでせう」

「それはさうね。それなら行つてらつしやい。何か御仕事の参考になるでせうよ」

「こちらは構ひませんか？」

「大丈夫」常子は言つた。

三

市内の東寄りに比治山ひぢやまといふ小さな山があつて、此処は広島県の名所で、野口は昔、高等学校の生徒の頃、属してゐた山岳部の部会で、脇本達と一緒に、朴菌の下駄を穿き、一升瓶を提げて、此の公園の中を放歌乱舞して歩いた事を憶えてゐる。遠くから見ると虎の寝た形に見えるといふので、臥虎山といふ別名があるが、最近はこの名所としてより、虎の背中に出來たアメリカの建物で有名になつて

あるやうであつた。

山を挟んで、東側の裾を国鉄の線路が、西側の裾を市内電車が、それぞれ広島駅と宇品港とを結んで走つてゐる。

野口は比治山下といふ停留所で電車を降りて、広い坂道を登つて行つた。

時々、「ABC」の文字を車体に記したジープや、シヴォレーのステーション・ワゴンが、彼とすれちがつて静かに坂道を下つて行き、或は彼を超越して勢よく坂を登つて行つた。車には、書類を膝にした二世風の女が乗つてゐたり、赤兒を抱いた若い母親達が幾組も相乗りしてゐるのが見えたりした。

道は左に廻り、右に廻つて、新しく切り拓かれた山頂の平地に達してゐる。其処には、色彩の豊富な、明るいアメリカ風の、蒲鉾型の建物が幾棟も建ち並んでゐた。車寄せの前の広い空地には、自動車がたくさん行儀よく並んで、運転手達が、車体を磨いてゐた。

扉を押して、車寄せの所から中へ入ると、何の匂ひか、かすかな外国風の匂ひがした。右手の受附には中々美しい日本人の看護婦（？）が、二三人坐つてゐる。彼は、自分の職業と、これから取り掛る筈の仕事の内容とを告げ、見学を申し込んだ。

一人の女の人が、台の上のノートに、ミスター・ノグチ

と彼の名を横文字で書きとめ、

「個人の御見学は、もしかすると難しいかも知れませんが、一寸お待ち下さい——」さう言つて、彼の名刺を見ながら、電話器をはづした。

暫く待たされた。彼は受附の先の、ロビーのやうになつた場所の隅のソファに腰を下ろして、机の上のアメリカの雑誌や、子供用の絵本や、又其の横にある子供用の木馬などを漠然と眺めた。掃除の行き届いた、滑らかな光沢を持つた床。窓枠や天井や机の、西洋人好みの色の配合。さつきから匂つてゐるかすかな何かの匂ひ。静かに往き来してゐる、真つ白な服装に口の紅だけ目立つ看護婦たち。それらのすべてが、此処を広島市内の全く別の場所、謂はば小さな外国に見せてゐた。

さうした雰囲気の中に、診察を受けに来た市民たち——子供をつれた若い母親が多かつた——が、所々屯ろしてゐる。其の人たちには、こんな綺麗な所へ自動車で送り迎へられて、何となく恐縮してゐるやうな、おづおづとした様子が見えた。馴れない客が豪壮なホテルに入つた時の様子にそれは似てゐた。

隣の椅子で赤兒にケープを着せて、帰り支度をしてゐる二十六七の女の人に、彼は、

「やはり、原子爆弾にお遭ひになつたんですか？」と、訊